
My WORLD

川犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MY WORLD

【Nコード】

N7780G

【作者名】

川犬

【あらすじ】

吉田香は高校2年生の夏、ある特殊能力に目覚めてしまう。それは、死なせたい人を恨むと殺せるというものであった。そして、世界は自分の思い通りになっていく。

プロローグ（前書き）

今回は長編になる予定です。

プロローグ

「これがお前のぞんだ世界なのか？」

金本光の問いに香は答えない。目の前のW高校には、もう人間がいなかった。これは、すべて香がやってしまった。もう手遅れだった。

「なあ？」

光がしつこく聞いてくる。

「こいつ、うぜえな。」

「そうだよ。」

「……どうして……おまえはそうなっちゃったんだよ……昔のお前のほうが良かった。今のおまえはただの殺人鬼だ。この世界ももう……終わる。」

昔のほうがよかった？んなわけねーだろ。

香は黙っている。

「きいてんのか！」

聞きたくねーよ。

恨んでやるよ。フッフ……。光……シネ。

「おい！……うっ……。……。……。……。……。……。……。……。……。……。」

光はどさりと倒れた。息はもうしていない。

香は光の顔を足でふんづけた。

「ああ……楽しい。」

光は相変わらず動かない。

こんなに簡単に人を殺せるなんて、今まで考えたこともなかった。というよりも人を殺すことは罪だと思ってきた。しかし、今の香の考えは違う。人を殺すことは……一種の快感だ。

「さて。」

香は光の頭から足を離すと今度は思いっきり光の頭をけた。変

な音をたてる。そして、ありえない方向へ向く。

香は歩き出した。高校とは反対の方向だ。

この高校にはもう誰もいない。香の殺人衝動が抑えきれなくなり、次のターゲットを探しに行くのだ。次のターゲットは……、あ、あそこがいいな。

香は今、マンションに向かってる。

目覚め - 1

7月23日、香は家にいた。まだ、夏休みに入ったばかりだ。しかし、中学校とは違い、夏期講習がある。午前中だけだが、勉強嫌いの香には地獄だった。

今日も夏期講習があった。1時限目は数学で、2時限目は国語、3時限目は英語だ。毎日、その繰り返し。

つまり、毎日地獄。それに、抜け出せるのは、土曜日と日曜日。それと、8月2日から9月1日までの小夏休みだけだ。

中学生に戻りたい。

「香、友達から電話よ。」

母、峰子がドアから自分の部屋に入ってきた。

「わかった。」

部屋から出て、リビングに行った。そこで、峰子から受話器を受け取った。それを耳に当てる。

「もしもし?」

そう言いながら、香は峰子に手であっちへ行けと示した。それに気が付き、峰子はわかっているというような顔で移動した。

「あ、香?」

「そうだよ。」

「おれだよ。光だ。」

「あ、光?で、何?」

「今度の土曜日デートしない?」

「え、まじ!?!いいよ!?!でどこ?」

「お前の好きなところ。さあどこでしょう。」

「うーん……。ドッグランド?」

ドッグランドとは、遊園地である。よく、犬がいると間違えられることがあるが、実際、1匹も犬はいない。

「……。あたり。」

しかし、今は違う。光の明るさと面白さが好きだ。はつきりそう
言える。

とにかく、土曜日は明後日なので、しばらく、明後日のことを考
えていた。

どういふ服を着ていくか。まあ、そんなところである。

最近の流行のファッションは香はあまり好きではなかった。なの
で、ピンク色の香のお気に入りのシャツを着ていくことにした。

ズボンはジーパンにした。服とズボンの愛称はバツチリである。

「これでよし。」

あとは、明日の高校の準備をして、そのままパジャマに着替え寝
た。

課題はしていない。面倒くさい。する気がわき起こらない。

香は、勉強はそれほどできない。が、代わりに体育ができるので、
まあよしってところである。

明日は学校サボろうかなあ。そう考えてしまうこともしばしばあ
る。

そして、実際にサボってしまうことが多い。

今までで、連続で高校を休んだのは3日だ。しかし、そのうちの
1回は本当に腹痛で休んだ。そのあと、だるくて行くのをためらっ
てしまい、ついつい休んでしまったのである。

いつの間にか、香は寝込んでしまっていた。

それを、監視カメラで見っていた、峰子は今日もほっと胸をなでお
ろしていたのであった。

目覚め・2

翌日の早朝、香は飛び起きた。時計を見ると、なんだあと思いました寝た。

香は今日がデートする日と寝ぼけて間違えたのである。

そんなことは誰もいないので別に気にしなかった。時間は7時だ。「ん！？7時い！！！」

今度もまた飛び起きた。いつもは6時半に起きていたのでかなり寝坊した。

大声を出したので峰子が1階から香のことを呼んでいる。

「香ー？やっとおきたー？」

そういったちようどその時に、ドアを勢いよく開け、1階に駆け下りた。

「ご飯はやく食べなさい。」

「どうして起こさなかったの！」

香は降りて、峰子の言葉をむしり、そう言った。

「え？いやだって、今日学校に行く時間がいつもよりも遅くてOKかなって思ったから。」

「勝手に想像して、勝手に自己満足しないでよ。」

「はいはい。それより早く食べなさい。」

香は急いで朝食のトーストにジャムを塗り、一気に平らげた。その時間わずか1分だ。

「あら、早いわねえ。」

それを香はまた無視して、洗面所へ行き、歯を磨きながら、寝癖を直した。その時間わずか4分だ。これは今までで最高記録。

香は本気を出せばこんなこともすぐにできるんだなーと思いつながらパジャマ姿から、制服に着替えた。

「行ってきまーすっ！」

台所で皿を洗っている峰子に、香は挨拶をし、出て行った。そし

て、自転車に乗って、猛ダッシュ。家から学校まで普通に走っていると時間がかかってしまうのでかなり急いでいるのだ。いつも会う友達の姿もない。かなり遅れてしまったと改めて実感した。

そして、6分で高校につき、駐輪場に止めた。

「ふう……。」

香は深呼吸をして、乱れた呼吸を整えながらも、腕時計で時間を確認した。

7時20分。……。

……。

早すぎた。異常なぐらいに早すぎた。どうやらまだ誰も来ていないようであり、教師たちもほとんど来ていないようだ。

香は額の汗をハンカチでぬぐうと、教室に入った。まだ誰も来ていなく、シーンとした空気が流れている。

「す……。」

香は自分のあまりにも早い行動を高く評価した。しかし、誰もいないのでなんだかさみしい。

香は廊下に向かった。そして教室に振り向く。3年A組と書かれている札がドアの上のほうにある。光は3年B組だ。2年の時もクラスが違っていたので、3年になってクラスが違つとわかってからも別に残念だとは思わなかった。

香は下駄箱にいった。誰か来るのを待つためである。誰でもいいのでとにかく自慢したい衝動に駆られてしまい、つい来てしまったのだ。

誰でもいいと言ったがもちろん友達だ。香自身、友達はかなり多いほうなので、誰でもいいと言ったのだ。後輩でも同学年の人でもいい。教師でも自慢話相手にはなるので別にいいのだが、なんだか変な空気になるような気がして教師には自慢することをやめた。

10分後。

ようやく誰かが来た。

「おっはよ……。」

大きな声でその人に挨拶をすると、驚いたらしく、びくつと肩を揺らしていた。

「や、やあ。」

彼の名前は、早瀬純だ。もちろん性別は男性で、小柄だ。女性の香よりも少しだけ大きいくらいなのでそうといえるだろう。

ともかく、純はおどおどしながら、そそくさと逃げるようにいつてしまった。自慢する時間を与えさせてくれる暇もないほどにある。

香は何だあいつと思いつながら、次来る人を待っていた。
約2分後、次のターゲットになろうであるう人が来た。

次の自慢されるターゲットは、滝沢黒子だった。

「やつほー。」

香は大声でそういうと黒子は気がつき驚いたような表情を見せた。

「か、香・・・はいね・・・。」

今まで、香より遅く来たことがなかったのか、黒子は目を丸くしている。

香は早速、今日の朝の出来事を話した。

「今日ね、朝7時におきたんだけどなんかめちゃくちゃ早く着ちゃったんだー。」

「え！？マジで！？すごいじゃん。やつぱ、香はやれば何でも出来るねえ〜。うんうん。」

「えへへ。まあね！」

香と黒子は一緒に廊下を歩き、教室に入った。そこにはやはり、純がいた。

純は香と黒子が入ってきてしばらくすると、出て行ってしまった。きつと、なんだか気まずいのだろう。

さらに、3分たつとバスグループがぞろぞろ来た。ここの学校には学校から遠い人達のために、スクールバスがある。そのスクールバスの一番早いグループの人達が来たのだ。バスは、2台しかないので次来るバスグループの人達は、5分ぐらい後になるだろう。

「お早う！」

香は光を見つけるや否や、すぐすっ飛んで言った。

「よお。。。つてはやつ！香、お前いつからそんなに早くこれるようになったんだ？」

「えへへへへ。今日ね、朝7時におきたんだけどなんかめちゃくちゃ早く着ちゃったんだー。」

香はさっき、黒子に言った言葉とまったく同じ言葉で言うと、光

は椅子に座り込んで頭を抱えた。

「はあ……。この俺様が香に負けるなんて……。がつくし……。」

「ま、まあ、それより明日楽しみだね！」

香がそう言うと光は今度は顔を持ち上げ、香のほうへ顔を向けた。その目は、輝いている。

「そつだな！」

明日。明日は待望のデートをする日だ。光とデートするのは光が忙しいのでなかなか出来ない。なので、明日がめちゃくちや楽しみなのだ。3週間ぶりだろう。

その後、香は光といろんな話に花を咲かせていると、あつという間に時間が過ぎて、教師が教室に入ってきた。

「よし、みんな、お早う！」

「おはようございます。」

いつの間にかみんな来ていて、そして、一人一人が挨拶をした。皆、小さな声で言ったが、この教室にいる30人の生徒たちが同時に挨拶をしたので、教師の挨拶をする声と同じぐらいになった。しかし、教師は顔をしかめた。

「挨拶するときはもう少し声を大きくするんだ。じゃないと、聞こえないぞ？いいか……。」

また始まった。この教師、荻田馨のいつもの長い口癖が。この学校では、挨拶が特に大事らしい。馨曰く、挨拶さえ元気よくすれば、相手に好印象を与えられる、そつだ。

しかし、香はそうは思わない。挨拶だけで相手に好印象など与えられるはずがないのだ。まあ、極稀に、好印象を与えられるかもしれないが、大抵は突然されると驚くはずだ。現に、さつき純と黒子を待ち伏せして、大声で挨拶をすると驚いた。そして、これが赤の他人にしたとすれば、その人は必ずこの人は元気がよすぎるだとか、少しうるさい人だなあとと思うはずだ。香はそうは思われたくはないので、大声で元気よく挨拶をする相手は教師達か、自分のことをよ

く知っている友達たちだ。知らない人には少し控えめに言うということにすることに香は決めている。

とにかく、挨拶はそんな積極的にするものじゃないということだ。香の考えでは。

譬の口癖も終わり、早速1時限目に入った。教師は変わり、稿技貫太郎が入ってきた。

香は、バックから数学を取り出した。

貫太郎が生徒たちが数学の教科書を机に置いたのをみて、こういった。

「よし、じゃあ授業を始めるぞ。」

このとき、香は、いや、この学校の人達は校長を除いて知らないが、3年B組にだけ、監視カメラが、いや、隠し監視カメラが設置されていて、それが、誰かを写していた。それを、峰子が見ていた・・・。

峰子はため息をついた。最近はずっと監視カメラの映像を見たり、影で隠れて香の顔を見ていたりするばかりだ。もううんざりだった。きつとこのことを香が知ったら嫌われるだろう。しかし峰子は、嫌われてもいい理由があった。

「・・・どうしてうちの子が・・・うちの子だけが・・・」
香には父親はいない。なぜなら、・・・ああ、思い出したくもない。あの時のせいで、香は悪くないのに、父は・・・父は・・・。

「がんばってください。」

ここは病室だ。峰子は脂汗を掻いていた。そして思いっきり力を入れる。

「オギャー!!!」

病室内で甲高い赤ん坊の声が響き渡る。峰子は力を抜いた。看護婦たちが峰子にこういった。

「生まれましたよ!」「がんばりましたね。」「おめでとございませす!かわいいですよ。」

そして、峰子に手渡してきた。この赤ん坊の名前は・・・そうだ香にしよう。自分の腕の中にはまだ元気に泣いている自分の子の姿があった。

その病室へまた1人の人間が来た。

「生まれたか?」

その人は入るや否や、大声でそういった。汗を掻いており、息を荒げていた。

それを見て、峰子は微笑む。

「ええ、生まれましたよ。ほらーお父さんでちゅよー。」

「あははは・・・。」

父、信男はもう泣き止んだ自分の子を抱いた。目には涙がにじり

出ていた。

「この子の名前はね、香って名前にしようと思ってるの。」

「ははは、そうだな。おまえがそれでいいならそれでいい。」

そうして、しばらくこの楽しい話は続いた。

5カ月後、峰子と信男はまだ生まれて間もない香と一緒に家で過ごしていた。

「香ー、高い高いだぞー。」

「。。。。。」

初めて信男は香を高く持ち上げた。しかし、香は、ただ信男のことを見つめている。ずっとこうだ。香は何一つ笑ったりしない。

そこで、信男は少し回転した。

「ほら、くるくるくるくる〜。」

「し。。。。ね。。。。。」

「へ？」

「しねよ。。。。。」

「な。。。。。」

信男はあんぐりと口をあけた。閉じることが出来ない。香は初めてしゃべった。しかし、どこでそんな言葉を覚えたのか、初めてしゃべった言葉は。。。。死ぬ。しかも、赤ん坊がしゃべり始めるには時期が早すぎる。

香はにんまりと笑った。そして、こういった。

「信男。。。。死ぬ。」

その瞬間信男は倒れた。香も一緒に落ちた。

「おぎゃあああああ!!!」

香が今度は泣き出した。その声が峰子に届いたのか、峰子が物音をたてながら、やってきた。

「どうしたの？」

そういつて、峰子は来たが、凍りついたように動かなくなった。

「あ、あなたああああ!!!」

涙をこぼす。峰子の隣には香がいた。そして、楽しげに笑ってい

る。

峰子は急いで、救急車を呼ぶためにケータイを取り出す。そして、電話をかけた。

「もしもし、父が、父が大変なんです。ええと、場所は……。」

峰子は場所を言い、ケータイを耳から離し、閉じた。

まさか。いや、そんなわけがない。ありえない。あんなことが・
・あんなことが・・。あれは、ただのインチキだと思っていた。
それは、1ヶ月前のまだ春になったばかりのときだった。

ピンポン。インターホンのベルが家内に鳴り響く。

「はいはい。」

峰子は玄関に出る。外に出ると、一台の黒い車が止まっており、そこに男の人が1人立っていた。

「どなたですか。」

明らかに怪しいその男の人はめがねをかけている。そして、そのめがねを手で少しほんの少しだけ持ち上げながらこういった。この時、めがねは少し光った。

「私、こういうものなんです。」

そういつて、名刺のようなものを渡してくる。そこには、**霊能者**、**案山子**吉雄と書かれている。

「**霊能者**?それがうちに何の御用で?」

その男の人は目を少し細めた。さっきのめがねの光よりも強く感じられそうな光を目から放っているように見えた。

「お宅のうちに何か悪いものがあります。今それをどうにかしないと大変なことになります。」

峰子は思い当たることがなく、吉雄に質問をした。

「大変なことはなんですか?それと、悪いものとは?」

一気に二つの質問をして、少し困った表情をしていたが、口をゆつくりとあけてこういった。

「もうすぐ、この家に不幸が訪れるでしょう。それと悪いものとは・
・現時点ではよくわかりませんが、何か特殊な力を持っている人

がいます。・・・うーんその子はまだ赤ん坊ですね。おや、しかも女性だ。」

峰子は気味悪がった。女で赤ん坊ときたら、香しくない。そして、同時に疑った。赤ん坊が、まだ1歳にも満たない幼い赤ん坊が子の家に不幸何てもたらずわけがない。さらに、この男は信用できないだろう、と思った。

「どうか、あがらせてください。ふふ、大丈夫ですよ。お金は決してかかりませんから。私は、フリーでこういうことをしているんです。つまり、ボランティアですよ。」

「帰ってください。」

「え、いや、ちょっと!」

「お引取りください!」

峰子は無理やり吉雄を押し通した。そして、思いっきりドアを閉める。ガタンツ!という大きな音が響き渡った。あんな怪しい男を信用してたまるかと思った。しかし、なぜか峰子は名詞を捨てなかった。ベビーベットの上で香はずっと峰子が無表情で眺めていた。

峰子は名詞のことを思い出して、名詞がしまつてあるところと言った。そして、必死にあさりまくる。すると、すぐに見つかった。

霊能者、案山子吉雄、と表に書いてある。裏にしてみるとそこには、電話番号が書かれていた。その電話番号を見て、電話をする。ぶるぶるるる・・・ぶるぶるるる・・・。

「はいもしもし？こちら、霊能者の案山子です。」
つながった。

「私です！峰子です！あの時はすみませんでした！早く来てくださーい！ー！」

峰子の声は震えてはいるが大きな声だった。目には涙がたまりだしている。

「え？待ってください。どうしたんですか。まずは落ち着いてください。もう少し、詳しく教えてください。」

「は、はい・・・。」

吉雄はもう一度言った。

「なにがあつたんですか。」

「父が倒れました。さっき、救急車を呼びました。」

「・・・やっぱり。」

「え？」

吉雄は、はつきりした声でこついつた。

「あなたの子供は、あなたの子供であつて違うんです。」

「・・・すみません。何を言っているのかよくわかりません。」

峰子は混乱しそうになった。それでも、こらえる。

「・・・あなたの子供の中身は違う人の霊にのつとられているんです。」

その言葉を聞いた瞬間峰子は受話器を落としそうになった。

吉雄は続ける。

「30分ほど待っていてください。今すぐそちらへ向かいます。」
「……はい……」
ピッ、プー、プー、プー、プー。

峰子は受話器を落とした。そして、足の力が抜け、膝を落とした。目の中にたまっていた涙が一気に溢れ出す。……峰子は救急車が来るまでずっとなっていた。

しばらくして、救急車が来た。救急車から人が2、3人出てくる。そして、父、信男を救急車に乗せて、逝ってしまった。行ってしまったではなく、逝ってしまった……。そっちの方が正しい。

香は、いや、知らない霊は、まだ笑っていた。かなり楽しいに。さつき救急車に乗っていた人たちが一緒に来てくださいと言っていたが、峰子は断った。遅れていくとだけ言った。するとその人達は救急車乗って病院へ行つたのだ。

20分経った。
ピンポン。

峰子は玄関のドアを開けた。目の前には吉雄がいた。

「あがらせてもらいます。」

そして、勝手にあがり、まるで香ではない者がどこにいるかわかるかのようにあの香ではない者がいる部屋に向かった。

峰子も後を追う。すると、吉雄は少し顔を歪ませた。

「うーん……。思ったより霊が成長してしまっている。」

「ど、どうしましたか？」

すると、吉雄はこういった。

「どうやら、少し遅かったようです。これでは、完全に霊を消滅させることは出来ない。」

「……」

峰子はあのと看の看を悔やんだ。どうして、あの時吉雄を信じなかったのだろう。どうして、追いついたりしたのだろう。そんなことさえしていなければ、香を助けられたかもしれないのに……。峰子の目にまた涙がたまっていった。それは後悔の涙である。

目覚め・6

吉雄は香でない者に視線を向ける。

「しかし、なんとか封印ぐらいなら出来ますね。」

「フウイン？」

吉雄は再び峰子の方を向く。

「はい。約20年間この赤ん坊の中にいる霊を封印することなら出来ないことはありません。ただ……。」

「ただ？」

「もし、霊の封印が解かれたら、そのときは……少しいづらいのですが……。」

峰子は涙をポケットティッシュで拭い、そのポケットティッシュをしまった。

吉雄はさらに一段階、真剣になる。そして、はっきりと峰子に聞こえる声でこういった。

「殺してください。」

「ッ……。」

また新たな涙が目にとまり、流れ落ちた。

「仕方が無いんです。そうしないと、人類は滅亡するかもしれない。」

「えっ？」

峰子は耳を疑った。人類が滅亡するかもしれない？そこまで危険なのか……。

「はい、前にも似たような例があったんです。そして、そのときは中国でした。その霊は1万人近くの人の命を奪ったんですよ。しかも5分で。」

「そんな話聞いたことはありませんが。」

「当然です。ニュースで流れたりしなかったのですから。」

「そうなんですか……。」

吉雄は今度はこう聞いてきた。

「それでどうします？封印しますか？」

峰子は大体予想はついていたがあることを聞いてみた。

「もし、封印しなかったら？」

「それは・・・今すぐ殺すしか選択肢がなくなります。」

峰子は開き直ったかのようにこういった。

「わかりました。封印してください。」

その峰子の表情を見て、吉雄は一瞬微笑んだ。そして、すぐに真顔にもどる。

吉雄は香の方を向いた。

何かを唱え始めた。すると、早速香が苦しみ始めた。

かおるの目が白目になり、こっちをにらんだ。しかし、すぐに元に戻り、すやすや眠りだした。

峰子はさっきの香のあのこの世のものとは思えないほど醜く恐ろしい顔をしばらく、頭から離すことが出来ないうでいた。

吉雄がふう、と安堵の息を吐き、こっちを向く。

「これで、約20年間安全だと思われます。しかし、この子が高校生になったころから、監視カメラで常に見張ってください。」

「・・・わかりました。」

吉雄は口元を緩め、玄関へ歩みだした。峰子も後ろからついていく。

そして、玄関につき、靴を履き、ドアを開け、吉雄は車に乗った。「さようなら。」

峰子がお辞儀をすると、吉雄はこっちを向いて、お辞儀をしながら車でどこかへ行ってしまった。

峰子はこう思っていた。もし20年経ってしまったら、そのときはこの子と一緒に死のう、と。。。。

目覚め・7

授業が終わり、給食を食べ終えて、香はちょうど自転車に乗ろうとしていたところだった。

するとそこへ、スクールバスグループの光が走りよってきた。

「おーい、香！」

香は自転車に乗ろうとする動作を止め、光のほうを向いた。

「なに？」

「明日、忘れるなよ！！じゃあな！」

香はにつこりと笑い、光もにつこりと笑った。

「じゃあね！」

光がぐるりと反転し、スクールバスのほうへ走っていく。それを見届けると、香は自転車に乗り、ペダルを漕ぎだした。

家に着くと、そこには峰子がいた。いつもどおり、昼食を食べ終え、食器を洗っているところだった。

「ただいま。」

峰子は香が帰ってきたのに気が付き香のいる玄関のほうへ視線を向けた。

「おかえり。どうだった？今日間に合った？」

「ふふ……。それがさあ、逆にめちゃくちゃ早く学校に着いちゃってさあ、驚いたよ。」

峰子は眼を丸くする。

「いつもより遅く家を出て行ったの？」

「うん！」

「あはは。すごいわねえ。まあ香はそれぐらいできて当然ね。」

「なによそれー！」

そうして、香と峰子は笑いあった。

峰子は食器を拭き、食器棚にしまいこむ。

「明日は光とデートなんでしょ？」

「え？どうして、母さんがそれを知っているの？」

「え……。な、なんででしょうねえ？」

「な、なんでって。」

「まあいいじゃない！気にしない気にしない！」

「わかったよ。じゃあ、2階に上がるね。」

「はい。」

「香は二階に駆け上がった。」

峰子は胸をなでおろした。そう、さっきの香との会話でうっかり監視カメラをみて聞いていた事を言ってしまったからである。監視カメラには、帰りで香が光と明日のことについて言っているところだった。

峰子はソファに座り大きなため息をついた。いつかは香と一緒に死ななくてはならないのだ。そうでないと、人類は滅亡する。吉雄はあの時そう言っていた。吉雄は香だけが死ねばいいと言っていたが、そんなことはできない。自分の子が死ぬのなら自分は生きていく意味がない。それももうすぐ香は20歳になるのだ。あと約三年……。

峰子は1日1日がいつの間にか怖くなっていた。

その夜。香は目覚まし時計のアラームが鳴る時間の設定を終え、ベッドでぐっすり寝ていた。

夢の中で、香は空を飛んでいた。下には自分と光が睨み合っている。

香はそれをずっと見ていると、光がばたりと倒れ、自分が光の頭を思いっきり蹴っていた。その光の首はあり得ない方向を向く。そこから、映像はぶつりと途切れた。

香は飛び起きた。ものすごい量の汗が出ていた。

「わあ！・・・。夢？」

さっきのは、夢だった。しかし、なんだか結構リアルだった。

夢の中の自分は何だか別人だった。外見は香そのままだ。だが、何か暗黒のオーラのようなものが出ているように見えたのだ。あれは一体何なんだったのか・・・。

「ど、どーせ夢だし。忘れよう。」

香は時計を見る。時刻は6時29分だった。

香はベットから風呂場へ移動し、シャワーを浴びた。それから、朝食を済ませ、服を着替えて、歯磨きをすると8時になっていた。

「そろそろ行くか。」

峰子はまだ寝ているので、手紙をそつと置いておいた。

そして、小声で行ってきますと言い、家を後にした。

峰子は本当はもう起きていた。寝たふりをしてしていると、香が入ってきて手紙を置き、行ってきますと小声で言っ、出て行った。

それから、峰子は眼をあけて、その手紙を見た。そこには、

5時ぐらいに帰ってきます。

香より

と書かれていた。

峰子は早速、いつものようにパソコンを起動して、香の監視カメラの映像を見た。香は、まだ駅で電車を待っていた。

峰子は朝食を食べた。そのパソコンの監視カメラの映像を見ながら。

「間もなく、8時20分発の列車がまいります。」
香は、電車が来ると5号車に乗り、あいている席に座った。
そしてケータイを取り出し、光にメールを打った。

「いまどこ？」

するとすぐに返ってきた。

もう着いた！！

はいいよお。

だって、昨日のが結構悔しかったから^^

^^じゃあね。

ああ。

香はケータイをカバンにしまい、少し眠った。

そして、しばらくすると「間もなく、 駅」 駅」と聞こえてきたので、扉が開くと香は降りた。

「ふう。」

この駅からドッグランドまでは歩いて約5分だ。

香は少し早歩きで歩きながらなぜか楽しいはずのこの後の光とのデートを少し不安に思っていた。それは、きっと、寝ている時に見たあの恐ろしい夢のせいだ、と香は思った。

目覚め・8 (後書き)

すみません。今回メールなどがあって、少し短くなってしまいました。

「光？あつ、光！こっちだよ。」

香が光に手を振る。光は香に気がついて、駆け寄ってきた。

香はニコツと笑う。

この日をどれだけ待ったか。久しぶりの光とのデート。香は胸が高鳴っていた。

「よ。入場券買いにいこうぜ。」

「うん。」

香は光と手をつなぎ、入場券売り場へ行った。機械に光が5000円札を入れる。光が画面に大人と表示されているところを2回軽く触れる。すると、入場券大人が2枚機械から出てきた。少し遅れて、おつりが出てくる。光がそのおつりを財布にしまいこんだ。

「よし！行こう。」

香と光が入場口から中に入ると、そこは別世界だった。

「まず、何からにする？」

「う〜〜ん。やっぱり最初はジェットコースター！！」

「・・・おまえなあ。はじめから絶叫系かよ。」

「いいじゃんいいじゃん。細かいことは気にしない気にしない。」

光はしばらく考えるそぶりを見せた。

「・・・ま、いつか。わかった。ジェットコースターに乗ろう！」

香の顔から笑みがこぼれる。それが、ピンク色の服とあっていた。

「やった。じゃあいこ。」

香は光の手をしっかりと握る。そして、ジェットコースター乗り場に移動した。

ジェットコースターに乗りこむと、しばらくして、ベルがジリリリと鳴った。これは、香が何度も聞いたことのある開始の合図だ。ジェットコースターがゆっくりと上に上昇していく。光はこういう絶叫系が苦手なジェットコースターが一番高いところまで行って

今にも勢いよく落ちるといふとき、目を閉じていた。

香は光とは違い、結構好きなので目を閉じない。

そして、ジェットコースターが下に落下しだした。

「ワーーーーー!!!」

周りには人が2、3人ぐらいしかおらず、絶叫している声のボリ
ュームは小さかった。

香は、このスリルがたまらなくジェットコースターがすきだ。

まず、輪を描くようにジェットコースターがぐるりと1回転して、
右に左にと大きいカーブをする。そしてさらに、3回転ほどする。

ここが一番スリル満載で楽しい時だった。つぎに右へ小さくカーブ
し、また1回転。最後に2回転と左に小さくカーブをして終わりだ。

「あー楽しかったー!」

香はだいぶ満足のようだったが、光は少しテンションが落ちたよ
うだ。

「次いこー!」

「ん、ああ……。次はどこにする?」

「えーとじゃああそこがいい!」

香は、メリーゴーランドを指差す。

光は助かったと思っているようなホッとしているような表情だっ
た。

「じゃあいくか。」

と、この時、後ろにある男がいた。

「よお、お譲ちゃん。一緒にこつち来ない？」

後ろから突然声がして香と光は振り返った。後ろには髪を金髪に染め、不良のような姿をした男がいやな目つきでこちらを見ている。

光は抗議する。

「あんた誰？悪いけど、香はそんなんじゃないから。」

「へえ〜！香ちゃんっていうんだあ〜。香ちゃん、こんな男よりおれのほうがいけてるぜ??」

「あんたおれの話聞いてんの？」

不良男は光のことをジロリと睨みつける。そして、突然光の顔面めがけてパンチを繰り出してきた。光はそれをよけきることができず、宙に舞った。

「光！」

「い、いつてえ……。貴様……。」

光がにらみつけているのを不良男は無視して、香の肩に手を乗せる。

香はその手を振り落として、不良男を突然人が変わったかのように悪魔のような目で睨みつけた。そしてなぜか、不良男が苦しみだした。

「……。ぐううおおおおおおあああ!!!」

そのうめき声で香ははつとなり、光を起き上がらせる。

「うっ！うわあああ!!!」

不良男はなぜか何かを恐れているかのように逃げて行ってしまった。

「……。香、どうやったんだ？」

光を起き上がらせた香はきよんとしている。

「え？なにが？」

「いまの。」

「いまの？なにかあったの？いつもどおりじゃん。あ、そうだ！早くメリーゴーランド乗りに行こうよ！」

香が光の手を引くが光はその場から動かなかった。香は光のほうに振り向き、首をかしげた。

「どうしたの？いかないの？メリーゴーランド。」

「・・・香、今何が起こったのか本当に何も覚えてないのか？」

「え。」

香は頭の中を駆け巡ったが、何もわからなかった。

「なんか起こったの？」

そこで光は今さっき起こったことを話した。

「香はさつき変な不良っぽい男に声をかけられたんだ。そして俺は殴られて倒れた。その時香が不良男をにらんだんだ。そしたら、不良男が苦しみだして、香がにらむのをやめた。そして、不良男が逃げ出したんだ。」

「・・・それ本当？」

「ああ。」

「・・・ごめん。全然記憶にないよ。不良男も知らないし。」

「そっか。まあいいや。どうせ偶然だろうからな。」

偶然。ぐうぜん。グウゼン。

なぜか香の中で偶然という言葉が響く。しかし、香はそんなのは全く気にもせず、再び光の腕を引っ張った。

「じゃあ、メリーゴーランドに乗りにいこ！」

光はしばらく考えていたが、顔をあげうなずいた。

「ああ。」

香が満面の笑みを浮かべる。

・・・どうせ気のせいかな。そう思ったかった。だから、光は無理やり思いこませた。

峰子はパソコンから目が離せないでいた。手が震えだしてきていた。

「そ、そんな……。」

峰子は無意識のうちに受話器を手に取り、電話番号を打ち込んでいった。

「はい、もしもし。こちら、桑山子吉雄です。どなたですか？」

「わたしです。17年ぐらい前に香のことでお世話になった峰子です。本当に桑山子吉雄さんですよね？」

峰子は声までもが震えだしていた。

「……はい。もしかして……。もう封印が……。」

「はい。たぶんそうだと思います。いますぐ……。いますぐ来てください。」

「……。わかりました。では30分後にそちらに到着します。」

「おねがいします。」

そして、峰子は受話器をもどして、座り込んでしまった。早すぎる。こんなに早く封印がとけてしまうなんて……。

峰子は肩を震わせながら泣きだした。

目覚め・10（後書き）

次は夏休み辺りに小説を書きたいと思います。最近書く暇がなかなかないので・・・。

光とデートし終えて、香は、自宅に帰った。それにしても、今日の光は何だか変だった。初めのほうはいつもどおりだったのだが、途中、そうメリーゴーランドに乗りに行く前あたりからおどおどしていた。

自宅には車が止まっていた。黒い車だった。

少し疑問に思いながら香は鍵で玄関のドアを開ける。そして、開くと扉の先には見知らぬ男性が母と話をしていた。母はなぜか泣いていた。

「ただいま？いまかえったけど・・・。だれ・・・？」

峰子のはつとなり、見知らぬ男性は険しい表情でゆっくりとこっちに振り返る。

「君が香さんかな？」

「は、はい・・・。そうですけど何か？」

「・・・実は君に話しておかなければいけないことがある。外にある私の車に乗ってくれないかな。」

香は峰子のほうを見た。峰子は香の視線を感じたのか下を向く。ただ、鼻をすする音が聞こえていた。どうして泣いているのだろう。どうしてこの見知らぬ男に連れて行かれるのだろう。どうして・・・。香の疑問は増えていくばかりだった。

とりあえず、香はいいですよと返事をした。男は香を車の中へ誘導し、車を発車させた。

なぜか峰子は外へ出てこなかった。それは、なにか重大なことがあると、それが自分にあると語っていた。自分はなにかいけない事でもしたのか。また香の疑問に追加された。

「由里。君だろ。」

香は突然自分のことを由里と呼ばれて戸惑った。香は、いったいだれですかと聞くつもりだったが、口が勝手に動く。

「よくわかったわね。」

「ついに君を見つけた。なあ、どうして香に取りついていたんだ？」

男がバツクミラー越しにこちらをちらちらとみてきているのがわかった。私に取りついた？いったい何のことなのか。体は自由に動く。だが口はいうことを聞かなかった。

「とりつきやすかったからよ。吉雄こそ私がこの子に取りついて嬉しかったんじゃない？」

「吉雄」と呼ばれた男はメガネをキラリと光らせた。

「うれしくなんかない。……残念だがおまえはもう悪霊化している。」

「うつさい……。ダメレ……。」

「ほら、それが証拠だよ。由里、お前を消す。」

今度はだんだんと香の体がいうことをきかなくなった。

「この体は私のものよ！そして、消えるのは吉雄のほうよ。」

「なに！？まさか……。もうつかえるようになったのか！？」

「ええ。ごめんなさいね。あなたはもう死ぬのよ。」

突然、香の思考がぷつりと途絶えた。

突然、香は頬を軽く叩かれて眼を覚ました。眼には消防隊員とみられる人物が映った。その人物がほかの人物に向けて「隊長！生きているようです！」、と叫んだ。

隊長と呼ばれた男はこちらに走ってきた。

「君、大丈夫か？」

「え、ええ……。あの……。いったい何が起こったんですか……？」

隊長は多少顔をゆがませたがすぐに直した。

「交通事故だよ。君と男が乗っていた車が大型トラックに衝突したんだ。それより、君は奇跡だよ。交通事故で無傷だとはね。」「え？」

香は自分の腕や足などをみる。何一つ痛みも感じない。香は意識を失う直前のことを思い出した。あの時、たしか見知らぬ男と車に乗ってて……。男が勝手に何かを言うと言った私が……。由里……。そう、由里と私は呼ばれていた。

「あの、私と一緒に乗っていた男性は？」

「……。それが、不思議なんだがね……。その男の人は最初はいたんだが突然姿を消したんだよ。」

「姿を消した？」

「ああ。その男もけがをしていなかったんだ。まあ、もうしばらくすれば見つかるだろうよ。そっぴやあ、君とその男の関係は？」

香は本当のことを言おう言わまいか迷った。本当のことを言えばその男が怪しまれる。もし、その男が何の罪もなく、尚且つ自分を助けるために車に乗せたのならば申し訳ない。

香の決断はこうだった。

「その男と母は友人関係で、私はその男がどこかへ遊びに行ってくれるということで車に乗っていました。」

「そうなんですか。」

「はい。」

向こうから声がした。

「隊長！急いで来てください！」

「ああわかった！今行く！」

隊長は返事をした。

「おそうだ。君の名前を聞いておこう。名前は？」

「香です。」

「そうか分かった。じゃあ、あとは病院で本当にけがをしていないかどうか確認してから家に送って行ってやろう。住所は？」

香はその質問に答え終え、隊長は隊員がいるほうへ行ってしまった。

その後、香は隊長が言った通りに病院へ連れて行かれ、いろいろと診断されたりした。しかし、予想通り何の問題もなく健康そのままだったので、再び隊長がきて、車に乗せてくれた。

隊長はさつき聞いた住所通りの場所へ連れて行ってくれ、お礼を言った後に車から降りた。

目の前には香の家があった。

ガチャッ

香は、玄関の扉の鍵を開け、中へ入って行った。中には峰子がい
て泣き崩れていた。その様子は、普通じゃなかった。

峰子は香の存在に気づき、驚いた。

「ど、どうして……。」

そう言い、峰子は香に抱きついた。香はえっ？となる。

「か、母さん、どうしたの？それとあの男の人は一体誰？どうして、
私はあの男の人に連れ去られなきゃいけなかったの？ねえ、どうし
てよ。」

峰子は、しばらくして何かを決心したかのような表情になり、香
に向ってこう言った。

「本当のことを言うわ。でも……真実を知っても絶対に自分を見
失っちゃだめ！わかった？」

「え……？う、うん。」

そして峰子は話し始めた。実は香には霊が取り付いていて、それ
が昔暴走して、父を殺してしまったこと。さっきの男の人は霊能者
で、香に取りついていて霊を封印したこと。それが、今になって封
印がとかれかかっていること。いままで、監視カメラなどで峰子が
香のことを監視していたこと。

すべてを峰子は話し終えると香の返答を待った。

香は衝撃的すぎて信じられなかった。特に自分が父を殺してしま
ったことに衝撃を受けた。今まで、峰子は自分に父は病気で亡くな
ったと言っていた。しかし、実際は

「私が……私が父さんを殺したの……？」

「香がやったんじゃない。あなたの中にある霊があなたの身体を利
用して、それで……父さんは殺されたの……。」

「……。」

「大丈夫？」

「え？あ、うん……。大丈夫だよ……。」

香は全然大丈夫ではなかった。もう死にたい気分だった。

香はその後、自室に行った。そして、ベットへバタンと倒れこむと涙が溢れ出てきてしまった。自分の中の霊が憎い。父を殺した霊が憎い……。許さない。ゆるさない。ユルセナイ！！早く、自分の中から出て行ってしまえ。そんなもの！消えろ。消え失せる！！突然香の頭の中で声がした。よく聞き取れなく、意識を集中させた。すると、その声はつきり聞こえた。

（あなたは悪くない。悪いのはあなたの母。さっきの話は私のこと以外全部デタラメ。本当はあなたの母が父を殺したのよ。）

香は、首を思いつきり振った。ちがう……。惑わされるな。これは私を利用しようとしているんだ。ちがうちがうちがう……。

また声が聞こえてきた。

（なんなら見せてあげる。）

香は壊れたおもちゃのようにばたりと倒れ動かなくなってしまった。

いつの間にか香は自分の家の外にいた。しかし、なんだか家が新しく見える。気のせいだろうか。

香は玄関から中へ入った。すると、大声が聞こえてきた。香はそつと耳を澄ませてみた。

「ふざけんじやないわよ！！もう金がないの？」

峰子の声だった。

「す、すまない……。今月はこれで精いっぱいなんだ！」

「うっさいわね！もっと金を稼ぎなさい！これじゃ、ギャンブルする金が少ししかないじゃない！」

「頼む！お、おい！！のこぎりとして何をする気だ！」

「決まってるじゃない。あなたをクロスノヨ。」

「やめてくれええええええええええええええええ！！ヴァアアアアアアアア！」

「!!」

「ふふふ……。」

そして、何も聞こえなくなった。香は座り込んでしまった。ひどい……ひどすぎるよ……。これが真実だったんだね。ユルセナイよ。今すぐ行くよ……。

香は眼を覚ました。そして、果物ナイフを手を取った。手は恐ろしいほど強い力で果物ナイフを握っていた。生まれて初めて、香は殺意を感じていた。

香は2階の自分の部屋の隣の部屋で寝ている峰子の目の前に立った。手にはナイフが握られていて、月の弱い光が反射していた。目の前には自分をだました者がいる。目の前には父を殺した者がいる。目の前には・・・憎たらしい親がいる。

香はより一層手に力を入れた。そして、峰子に刃を向ける。ユルセナイ・・・！

その刃を香は思いつきり峰子の首めがけて突き刺した。峰子は一瞬大きく眼を見開いて、悲鳴を上げることなく、寝息を止めた。首から血がベットのシーツに広がる。

「はぁ・・・はぁ・・・。」

香はナイフを落とした。

「あ・・・ああ・・・！」

初めて人を殺した。それも自分の親を・・・。さっきの殺意は消え失せ、代わりに恐怖を感じた。ナイフを持っていた手が震えている。何をやってしまったんだ・・・。私はとんでもないことをしてしまった。

香はその部屋から逃げ出した。そして、ケータイが入っているバッグを持ち、家までも飛び出した。

しばらく走り続けて、息を切らし立ち止った。いまだに震えている手でケータイを取り出し、電話をかけた。

「もしもし？香？どうしたんだ。」

向こうから光の声が聞こえてきた。

「どうしよう・・・。母さんを・・・殺しちゃった・・・！！」

その声はいつもの声ではなかった。震えている声だった。

「え・・・。」

しばらく、沈黙が続いた。それから、向こうから声を出してきた。「俺の家にこい。親は友人の家に行っていていないから。」

「・・・うん。」

「そこで、詳しく俺に話すんだ。何があったのかを。」

「・・・わかった。」

「じゃあ・・・な。待ってるぞ。」

「うん。ありがとう。」

香はケータイを耳から遠ざけた。安心した。もしかしたら、嫌われるのかもしれないと思った。しかし、それは違っていた。光に感謝した。こんな、いい人この世に光一人しかいないだろう。

香は、光の家へ向かった。

吉雄は峰子の住んでいる家の中へ入った。何故か玄関の扉には鍵がかけていなかった。・・・手遅れだったのかもしれない。

吉雄は峰子を探した。1階をすべて探した。しかし、見つからなかった。2階へ駆け上がり、真ん中の部屋へ入った。そこには峰子が横たわっていた。暗かったので明かりをつけた。寝ているのではない。それは、首をナイフで突き刺され虚空をみていた。首から血が流れ出していたのか固まった血液がへばりついていて。シーツは赤く染まっていた。

「くそ。遅かったか。」

由里・・・。ついに動き出したな。まだこの殺し方からみると今は香という女性を完全に飲み込めていない。つまり、洗脳をしたのだ。由里なら、人を恨むだけで殺せるはずだ。それなのにナイフで殺害するところを見ているだけでもわかる。まだ初期段階だ。・・・落ち着け・・・。まだ・・・間に合う。被害者をこれ以上増やすわけにはいかない。由里を完全にケス。俺の手で!!!

香は、光の家の前にいた。一度大きく深呼吸をして、チャイムをゆっくりと押した。

しばらくして、光が出てきた。光が出てくるまでの時間が香には長く感じられた。光は深刻な表情だった。

「中に入れ。」

香はうなずき、光の家の中へと入った。そして、光の部屋まで行き、香を中へ誘導させた。その後、光も中に入り戸を閉めた。

「で、何があつた？」

香は話し出した。

「うん。ドックランドから、私は帰ってきたら男の人が母さんと話をしていたの。その時母さんは泣いてた。」

「どうして？」

「分からない。それでね、その男の人の車に乗れって言われて、乗ったんだ。母さんは乗らなかつた。そして、車に乗ってしばらくすると、男の人が私のことを由里って呼ぶの。私は誰ですかって聞くとしたらなぜか、口がいうことを聞いてくれなくて、よく分かつたわねって勝手に言つたんだよ。」

「無意識的に？」

「うん。そのあと勝手に会話して、気が付いたら、私は交通事故にあつて、倒れていた。」

「え？怪我は？」

「それが不思議で、怪我が一つもなかつた。それで、男の人がいないのに気がついて他の人に男の人はどこですかって聞いて、行方不明ですって言われたんだ。その男の人は途中まではいたけれども途中でいなくなつたんだって。その人も無傷だったって。」

「そのあとは？」

「そのあとは、家に帰った。家に帰ったら母さんが驚いてた。それ

で
」

香はその後も今さっきあったことをすべて話した。

光はすべてを聞いてしばらく考え込んだ。あのドックランドで不良男に会った時も香はおかしかつた。本人は気がついてなくとも不良男に確実に何かをした。超能力か？しかし、そんなことはできるはずがない。それと、香は勝手に口が動いてしゃべりだしたり、自分の頭の中に話しかけられるかのように、女の人の声が聞こえたと言っていた。つまり、香は二重人格なのかもしれない。話をまとめると、香の中には、超能力を持ったもう一人の自分が存在するのかもしれないということだ。とすると、その男の人が何か知っていそうだな。

「・・・うつつうつつ・・・。」

光が香をみると、香が泣いていた。光は香を抱きしめた。

「大丈夫だ。香が悪いんじゃないんだから、そう泣くなつて。」

「・・・う、ん。ありがと。」

光はそうは言ったものの少し香を警戒していた。いつ、彼女がいつ、またもう一つの人格が姿を現すか分からない。もし、いまそいつが姿を現したら、俺は死ぬだろう。光は、そのことだけ警戒していたのだ。

吉雄は光の家を目指していた。香がそこにいるのは私の勘が当たっていれば、間違いない。これ以上被害を増やしたくはない。死んでもらうぞ。由里・・・。

しばらく時間がたった。香は、光のベッドで寝ていて、光は近くのソファで寝ていた。しかし、実際光は寝てなんかいなかった。眠れない。それも当たり前だ。香は誰かに狙われているかもしれないのだ。のんきに自分が寝ていちゃいけない。

またしばらく時間がたった。もう深夜だ。

「ひひひ・・・。」

突然、笑い声が聞こえてきた。それは香のものだった。光はソファから起き上がって、香の様子を確認した。

香はベッドにいなかった。光は、いやな予感がした。

「か、香・・・？」

焦りながら光は、周りを見渡した。暗くてよく分からなかった。

光は電気をつけた。蛍光灯の光が光を含む部屋一面に広がる。香は・・・いた。こちらに近づいてきていた。

「どうしたんだ。香。」

香はかすかに笑いながら近づいてくる。光はいやな予感がして、玄関のほうへ後ずさった。

「私は香なんかじゃないわ。」

「な、なにを・・・。」

「由里よ・・・。」

「な！まさか！？お、お前は一体何なんだ！香から出て行け！」

由里はにやりと笑いながらまた一步近づいてくる。光は顔を青くした。

「残念ながら、それは無理よ。私にもできない。でも。」

「でも・・・なんだよ！」

「あなたをクロスコトハデキル。」

由里の声が恐ろしく聞こえてきた。光はさらに後ずさった。このままじゃ・・・殺される！！！！

由里という名の殺人鬼はゆっくりと確実に光との距離を縮めていく。手には包丁が持たれていた。光の野菜や肉を切る時用の包丁だ。しかし、肉といっても今は意味が違う。おれの肉だああああああああ！！！！

「そこまでだ。」

後ろから声が聞こえてきた。いったい誰だ……。

由里の表情が変わっていく。それは、驚いているようだった。

「おまえ、は。吉雄おおおお！！！！殺すクロスウウウヴァアアアアアア！！！！」

光は今度こそ逃げた。玄関から家の外へ飛び出した。そして、一度振り返り、また背を向けて走り出した。

「そこまでだ。」

吉雄の息は荒かった。由里の表情が変わった。驚いていた。

「おまえ、は。吉雄おおおお！！！！殺すクロスウウウヴァアアアアアア！！！！」

目の前には由里以外のもう一人の青年がいた。その青年は恐ろしくなったのか、逃げ出した。たしか、香の彼氏で光といった……。なんとか犠牲を出さずに済んだか。

「お前をこれ以上動かすわけにはいかない。死んでもらうぞ。」

由里は包丁を一直線に吉雄の心臓めがけて突っ込んできた。吉雄はさつとよける。が。

ブシューウウウウウウウウウウウウウウ！！！！！！

腹のあたりから、血が勢いよく噴き出してきた。赤い液体だった。激痛に思わず吉雄は腹を押さえる。

「な！？まさか！！！！うう……。」

由里はにやりと笑い、また包丁を今度は首辺りを狙って突っ込んできた。

吉雄はとっさにポケットから拳銃を取り出して一発撃った。その弾は包丁にあたり、包丁が吹っ飛んだ。しかし、由里の突進は止ま

らず、吉雄に思いつきり当たった。吉雄も吹っ飛ぶ。

吉雄はなんとか受け身を取ったおかげか立ち上がることはできた。くそっ！！こいつはもう半分ぐらい由里に蝕まれている！！油断してしまっていた。くそおおおおおおおお！！俺が犠牲になっってしまうのか！？こんなやつにいいいいいい！！

吉雄はわずかに血が付いている眼鏡を拭いた。由里は笑っていた。

暴走 - 7 (前書き)

少し遅れました。すみません

光は、家の外へと飛び出しとにかく逃げた。逃げる場所を選んで
いる暇なんてない。もう頭の中は香の中の由里という化物でいつば
いだ。あれは、どう考えても香ではなく由里だ。自分で由里と名乗
っていた。

光は、勢いよく振り返った。約3分間全力疾走に近い走りで行っ
てくれたたになつていた。後ろを振り向いたが暗くてよく見えな
かった。電灯は消えたり光つたりを繰り返して、虫が飛び交って
いる。たぶん、藪蚊かなんかだろう。だが、そんなことはどうでも
いい。

ガサッ！

「っ！」

ビクンと光は肩を震わせて音がするほうを向く。背丈が長い草の
間から何かが出てくる。

ニヤア

猫だった。光は肩から力を抜き、再び走り出した。今度は少しス
ピードを下げて走った。正直、さっきの全力疾走に近い走りをした
せいで息を切らし、倒れてしまいそうだ。さっきの全力疾走に近い
走りをもう一度する体力はもう残ってはいない。

光はポケットに手をつ突っ込んで何かを取り出した。財布だ。光は
いつも、泥棒に盗まれないために財布をポケットの中に常備してい
る。その財布の中にテレフオンカードと金があることを確認した。
これで、なんとか・・・

吉雄は、荒い息を吐いて、由里を睨んだ。由里は笑っている。そ
の笑顔は前にも見たことがある。遠い昔、どこかで・・・

「由里・・・ハアハア・・・おまえ・・・もう俺の・・・封印を・・・
半分以上もといたの・・・か。」

由里は相変わらず笑っている。悪魔に見える。死神にも見える。とにかく、負のイメージが吉雄を取り巻いた。

「あたりまえじゃない。こんなものであたしを封印できると思ったわけ？・・・甘く見られていたようね。」

由里の手には血が付いている。赤く染まった手は包丁を握る。その包丁もが赤く染まっていた。その包丁の刃が吉雄に向けられた。吉雄は軽く笑った。だが、無理をして笑っているようにも見える。

「何？もう覚悟は決まったの？」

「耳を・・・澄ませて・・・みる。」

ピーポーピーポー…

この音を聞き、由里の顔から笑顔が消えた。悔しそうだ。

「あなたは、死に損なったわね。運がいいわ。でも、もう私をトメルコトハデキナイ。」

そして、由里は窓を開け、飛び降りた。ここは、二階だ。だが、あいつにとつてはなんてこともない。

吉雄は、サイレンの音が大きくなるのをへ垂れこんで目を閉じて聞いていた。・・・俺が、止めてやるさ・・・。昔約束したんだ・・・。もしお前がそうになったときは俺が止めてやるって。だから、安心して眠れって・・・。

光は、コンビニで食料を買った。そう、今自分の家に行っても由里という怪物がまだいる可能性が高いので容易に近づくことができず、ホームレス生活に近いことをしようと思ったのである。それしか、生きるための手段は光には残されていない。

財布の中にはお札が何枚か入っていた。数えてみると、約2000円だ。これくらいあれば何とかしばらくは持つ。いや、明日は月曜日なので明日まで持てばいい。それなら簡単だ。なぜなら、今はもうすでに深夜だからだ。夜食を買ってあとは、それを食べてどこかで寝る。それだけで、明日になる。明日になり学校に行けば、皆いるはずだ。たとえ、由里が現れたとしても、こちらは多数なので、何とかなるかもしれない。光に少しだけ、希望の光が見えた。とりあえず、光は夜食を買って、それをコンビニから出てから急いで食べた。そして、そこら辺のベンチに横になり、寝た。

香は暗闇の中にいた。ここは・・・どこ・・・？

数十秒経って、今が夜だということに気がついた。香は光の家で寝た後のことを必死で思い出すとする。・・・何も思い出せない。香は確かにベッドの上で寝ていた。しかし、なぜだか、道路の端で寝ていたのだ。突然、頭に声が響いた。

(明日、学校に行きなさい。)

ゆ、由里・・・！！そう、その声は由里の声だった。これで、なぜ香がこんな所で倒れていたか分かった。由里に体を一時的に乗っ取られていたのだ。

頭をぐるぐると振る。やめて！！私の中から早く出て行って！！

(そうは、・・・イカナイワ。)

ふざけないで！！明日、学校になんか行かない。絶対に！！
突然、ひどい頭痛が香に襲いかかってきた。その頭痛はおそらく

由里が起こしたものだろっ。

「ウ、ウウ・ウヴァアア！！や、やめてっ！！ウヴァアアア！！！」

香はうずくまった。ここは誰もいない、家もない、ただの道路だったので、その悲鳴は響き渡るだけ響き渡り、消えていった。しばらくして、頭痛が治まってきた。

（もう一度、言うわよ。明日、学校に行きなさい。）

「・・・わ、わかった・・・っ。」

思わず、声に出してしまった。それぐらい、精神的にも肉体的にもかなりのダメージを受けたのだ。このとき、初めて自分は弱くて、ちっぽけな存在だと認識できた。

（・・・っ！あはははは！！よくいったわ。それじゃあ、今日ももう、寝なさい。）

「は・・・い・・・。」

涙がじわりと出てきた。どうにかして、抵抗できないか・・・。

（ハヤクネ口。）

っ！ばれてる・・・。そう、香が何を考えているのかを由里はわかるのだ。なぜなら、香の中に由里はイルノダカラ・・・。

香は、もう何も考えずに無理やり寝た。

月曜日。朝。

光は、午前8時ごろにはもうすでに学校に来ていた。早く来た教師たちも驚いている。なんとたつて光は、普段スクールバスで登校しているはずだからだ。それが、いつもよりかなり早く、徒歩で来たからには教師たちが驚かないわけにはいかない。

一人の若い男の教師が校門でなぜかそわそわしている光に話しかける。

「君、早く中に入りなさい。それと、今日はどうしてこんなに早く着いたのかい？」

そういつて、教師は光の顔を覗き込む。光の眼はうつろだった。そして、無言だ。

「えーと・・・光君だったかな。僕の質問に答えなさい。」

「・・・今日この学校の人々が皆、息絶えるかもしれません。どうかして、みんなを避難さしてください。」

「はあ？何を言っているんだ。みんなが息絶える？悪い夢でも見たのか？」

校舎の窓から、覗き込んでいる生徒たちが見える。光はその方角を指差した。

「あそこにいる人たちです。早く非難させてください！」

「あそこにいる人たちです。早く非難させてください！」

光は突然大きな声ではつきりと言った。今まで寝不足やこれから起こる恐怖を連想してしまうせいで、教師の声が耳に入ってこなかった。そう、昨日は学校の人たち全員がいれば何とか由里の暴走を止められるかもしれないと思っていた。しかし、それは違っていたのかもしれない。そう思うようになったのは、午前3時に逃げればわかる。

午前3時。

光は恐怖で眠ることもできずに寝返りばかりうつっていた。しかし、それもベンチが狭いせいで、あまりうまくできない。そんな光の肩が何者かによつて、不意に揺さぶられた。光は目を開け、起き上つて揺さぶられた方を見た。誰かがいる。視界が、微妙にぼやけていて顔が見えなかった。

「おきたか。」

その人の眼鏡が月の光でかすかに光った。光は、目を見開いた。がばつと起き上る。

「あ、あなたは!!」

腹部に怪我を負っている。その人はついさつき、光の家で由里にやられそうな所を助けてもらった人だった。

「そうだ。私だ。私の名前は、案山子吉雄だ。・・・っ!」

吉雄といった男は、がくりと倒れた。

「だ、大丈夫ですか!??」

「あ、ああ……。心配ない。これぐらいならなんとかな……。腹部の怪我が痛むようだ。ど、どうすれば……。心配しなくていい。それよりもこれだけは聞いてくれ。」

「は、はい……。」

吉雄は、香と由里について語った。

「なるほど……。そうだったんですか……。じ、じゃあ!香は死ぬしか選択肢がないんですか!??」

吉雄は難しい表情になって、ゆっくりとうなずいた。

「それとだ、由里はまだ、完全に封印はとかれていないが超能力のようなものを持っている。気をつけるんだ。」

「それはいつたい……。」

「ある人をAとしよう。そのAが由里に何か恨めしいことをしたとする。すると、由里はその人を恨む。Aは死ぬ。そういう能力だ。」
「え……。」

光は勝ち目がないと思った。そんなのと戦って勝てるわけがない。自分は間違っていた。

「まあ、明日は気をつけろよ。」

「……。」

吉雄は去って行った。光は途方に暮れてしまった。

暴走 - 10 (前書き)

すこし短くなってしまいました。すみません

香はひどい頭痛で目が覚めた。ここは、路上だった。

(やっと起きたわね。)

そんな声が脳内に反響する。再び反響した。

(学校に今行きなさい。すぐに。)

「・・・いや。」

香が否定すると頭痛が蘇ってきた。痛い・・・！イタイ痛いっつ
つ！！

「ヴアアアアツ！！や、ヤメテ！ワカッタカラワカッタカラ！！」

香の声は民家がないただの道路に響き渡った。頭痛が治まる。

「はあ・・・はあ・・・。」

目から涙が滲み出る。胃が食べ物を欲していた。昨日の夜から何も食べていない。体力は、減少の傾向にあった。

(学校に行きなさい。)

「・・・はい。」

今が何時かは不明だ。できれば、学校が始まる前のほうがよろしい。そうすれば、犠牲者が減る可能性が上がるからだ。もう今の自分では由里をどうにかすることはほぼ不可能に近い。反抗すると頭が割れるように痛くなってしまい、思わず了承してしまうからだ。

(朝食は・・・そこらへんの雑草でも食べなさい。食べながら学校に向かつて。)

雑草なんてとてもじゃないけれど食べることもなんてできない。食べることを口は拒絶するだろう。

「それは・・・無理・・・。」

(無理？なら、朝食は抜きね。)

香はそれでもいいと思った。雑草を食べて戻してしまうよりはまだかなりマシだ。

香は、高校へ向かった。時刻は香は知らないが、午前8時だった。

高校に到着する頃には、もう皆集まっているだろう。

「・・・ここからどう行けば・・・高校にたどりつけるの・・・？」

(それなら簡単。ここをまっすぐ進んで。T字路を左に曲がって。

そして・・・)

由里は、高校までの道順を教えてきた。

香は言ったとおりに進んだ。もう抵抗はできない。したら・・・

・・殺される。しにたくない。いやだいやだいやだ。まだ死にたく

ない!!!

しばらくして、香は高校に到着してしまった。

暴走 - 111 (前書き)

ヒカリトヤミノゲームを休止しましたが、こちらはするつもりはないので、ご安心を。

香は学校に到着した。校門の前で教師と生徒が話している。香は息を飲んだ。・・・その生徒は光だった。

光はこちらに気づいていない様子で教師に何かを訴えているように見える。教師は首をかしげている。

(殺しなさい。)

「・・・え？」

予想はできていたが、頭の中で由里の声が響き渡った。最悪だ。心臓の鼓動が加速する。

(コロセ。)

「こんどこそ・・・無理・・・ウ、ウヴァアアアアアア!!」

香は必死に頭痛を堪えた。目から涙がボロボロこぼれてくる。あまりの痛みにわかったと声を発してしまいそうになる。だが、堪えた。光を殺すことは私には・・・できない。できるはずがない。なぜなら、光が好きだからだ。恋人をまでを殺すことができるはずがない。殺してしまえば、私には何もなくなってしまう。大切なものが失われてしまう。そんなのはいやだ。いやだいやだ。絶対に・・・イヤダ!

光はさっきの香の悲鳴に気がついたのか、こちらを振り返った。そして、明らかに表情をゆがませていく。後ずさっている音が聞こえてくる。好きな人が私から離れていく。さみしい。つらい。しかしそれでいい。それでいいのだ。なぜなら、それで光が助かるのだから。

「光!!逃げ・・・ヴァアアアア!!・・・逃げてえええ!!」

光は香がそういう少し前からすでに足を動かしていた。教師はそこに突っ立っている。

(っ!仕方がないわね。少し早いけれど)

香は肩をぶるぶるとぶるわせた。そして・・・頭痛が治ま

った。

「・・・え？頭痛が・・・治まった・・・？」

「大丈夫か？お前。」

その声の主を香は見た。さつき光と話していた教師だった。なぜだろう。その教師が憎い。香は自らの感情を不可思議の思った。なぜ、今この教師が憎いなどと思ったのか・・・。わからなかった。しかし・・・やはり憎かった。

その教師は、手をさしのばしてきた。

香はその手を振り落とす。教師の顔がみるみる怒の文字が似合うような表情に変わっていく。

「おい！なんだその態度は！！それが教師に向かってする態度なのか！」

「だまれ。」

なぜか勝手に口が動いて勝手に声帯が震えて声を発していた。私は今何と言ったか。だまれ、といった。この教師が・・・憎いからなぜか。・・・わからない。

それに、頭の中で由里の声が聞こえなくなった。これまたなぜかわからないが、もう私の中に由里はいないような気がした。

教師はものすごい剣幕で怒鳴っている。なんて言っているのかはわからない。むかついた。こんな教師なんて死ねばいいと思う。消え去ればいいと思う。いなくなればいいと思う。消えろよ。消えろ。消えろ！！！！

教師は、なぜか突然青ざめていった。そして、ばたりと倒れた。

香は・・・にやりと笑った。楽しいな。こういうの。

さっきの由里の恐怖なんて香には皆無だった。忘れてしまったのか。いや違う。忘れてなんかいない。なんだか人を殺すことなんてしてはいけないと思うことがばかしくなってきた。

香はにやりと笑い、暴走を開始した。

8時20分。吉雄は、高校の校門から数十メートル離れたところで、車に乗って隠れて光が教師と抗議しているところを見ていた。そこへ、あいつがやってきた。由里だ。吉雄の予想ではまだ、由里は香の体に乗っ取ることとは不可能だと思う。昨日のあの由里の様子から見ても超能力に近いものを使えなかった。ということは、時間的にも乗っ取られるのはまだ早い。

まだ、由里の暴走を止めるチャンスはある。

香は突然、悲鳴をあげながら頭を抱えている。吉雄は香に注目した。・・・そうか。香をそうやって操っていたのか。つまりはこういうことだ。香が反抗すれば、香の頭に刺激を加えて頭痛を起こしている、絶対服従をするしか頭痛をなくすことはできなくなるということだ。もしくは・・・香るが自殺する。だが、それは由里が許さないだろう。

光は香の姿に気がついたのか逃げた。教師は突っ立っている。とおもいきや、香のほうへ、向かって手をさし伸ばしていた。香はなぜかその手を振り払った。そして、自力で立ち上がり教師を見ている。いや、にらんでいる様にも見える。教師はものすごい剣幕で香を怒鳴りつけていた。しかし、突然教師は・・・・・・倒れた。香はただそれをじとーっと見ている。

「な!？」

吉雄は勢いよく車のドアを開け、香の元へ走っていく。まずい。自分の予想が外れた。完全に外れた。心臓の鼓動が早まる。あまり走っていないのに、息を切らしている。腹部が痛い。それは、昨日、由里にナイフで刺されたところだった。包帯で応急処置をとったものの1日で傷が治るはずがない。むしろ、今走ったせいで悪化した。その腹部の痛みにこらえながらも、吉雄は由里のほうへ走っていく。香・・・由里はこっちを向いた。その目には冷たさしかなかった。

凍えてしまうような冷たい視線。そして、敵を見るような目。

「由里・・・なのか・・・？」

そう問いかけると、にやりと笑ってきた。

「私は香。由里じゃないよ。」

「何？そんなはずはない。お前は人を呪い殺すことなんてできないはずだ。・・・まさかっ！！」

まさか、由里と香が一体化したのかと聞いてみようとしたがやめた。そんなことを聞いても、香自身は一体化したことはわかるはずがない。

「くそ・・・！！」

「まさか、何？・・・どうでもいいけど。そんなことより、なんだかわかんないけどあんたが憎いの。」

「そうか、由里。・・・すまないな。お前に俺は殺せない。」「私はユリジャナイ！！」

香はじとーつと蛇のような目で吉雄のことをにらんでいたが、

「本当だね。・・・でもね。」

背筋がぞつとした。

「私はナイフを持っているんだよ。」

そのナイフは昨日のナイフと同じものと見ていいだろう。

香はナイフをポケットから取り出した。ポケットの中にナイフをずっと入れられたのか疑問になるが今はそんなことはどうでもいい。ふふふと笑い声が聞こえてくる。

・・・くそ。どうすればいいんだ？ここから、逃げ出せばいいのか。それとも、香と由里が一体化した怪物を押さえ込むか。腹部の傷が治っていないことからにしても、前者のほうがいいのだが、ここで逃げてしまうとこの高校の生徒たちと教師たちが危ない。

「さあ、て。どこから、サソウカー？」

もうこいつは完全に姿は香で中身は由里。もう、由里が香を乗っ取ったも同然だ。

香はナイフを平行にして、一気に詰め寄ってきた。

香は、一直線に吉雄目掛けてナイフを突っ込ませるが、直前で横にかわされた。しかし、簡単にかわされたわけではない。なんとかかわした、そんな感じだった。吉雄の体力ももう限界が来ているのだろう。昨日の夜に何があったかは知らないが、由里が何かをしてくれたおかげだ。ああ、楽しい！

「・・・由里。お前をこれ以上、暴れさせるわけにはいかない・・・ぐっ！」

吉雄は、わき腹を抱えた。そこから、赤いものが染み出てきている。どうやら、傷口が開いたらしい。香はにやりと笑った。

「今日があなたの命日ね。死んでねっ。」

悪魔のような笑みを浮かべ続けて、吉雄に刃先を向ける。今は、もうなにもためらわない。なぜなら、人を殺すことが楽しくて仕方がないのだから、こいつが恨めしいのだから。

吉雄はうっすらと汗を浮かべて、息を荒げている。このまま放っておけば、逃げられる。なら殺すしかない。

「俺は、お前を・・・助け出してみせる！！！」

いきなり、吉雄がこっちに向かって突進してきたのかと思っただが、そのまま香を通り過ぎていった。そして、学校のほうへ向かっている。何の真似なんだろうか。・・・無駄なのに。こんなこととしてもすぐにつかまって殺されるのにね。

「さあて、殺しに行こうかな。」

香は、学校のほうへゆっくりと歩みだした。

30分後。学校内では、騒がしくなっていて、皆、混乱して慌てふためいて、逃げようとして・・・いかなかった。光がさつきからみんな逃げるだとか、死ぬぞだとかわめいているが馬鹿みたいだと思えなかった。何が言いたいんだこいつは。この俺、早瀬

純は皆と交えて笑っていた。最初深刻そうな顔をして大変だと大きな声で叫んできたときは、驚いたが、冗談のつもりで言っているのだろうか、超能力でやられる、だとかほんとに意味が分からない。「おい光。お前馬鹿なんじゃねーの？頭イカレちまったんじゃね。香ってお前の彼女じゃねーか。」

誰かがそういうとまた笑った。

「違う！あいつは・・・あいつは・・・由里だ！！香なんかじゃない！あんなやつのが香なんだよ！あれは、怪物だ！」

「うわー、ちよまじこいつサイテーなんですけどー。」「そうだよー。香ちゃんがかわいそーだよー。」

笑いながら、軽蔑のまなざしを突き刺す女子たち。面白い。

早瀬は、こつ聞いた。

「・・・お前、夢の出来事じゃないの？」

「違うんだー！ー！！なんでみんな信じてくれないんだよ！」

光は青ざめていた。どんな夢を見ていたんだか。本当に笑える。

これは、この学校の笑える歴史にでもなってしまうくらいに面白いな。

とその時、教室の扉が開く音がした。そこに立っていたのは、腹部が真っ赤に染まっている眼鏡男だった。かなり弱っているよう、息を荒げていて、目が虚ろだった。

光は腹部を赤く染めた吉雄が来たのを見て、教室の中にいる生徒たちと教師を見る。その目は、確信に満ちていた。

「おい！この人を見てもわかんないのか！！早く逃げろよ！逃げてくれよー！！」

教室の奴等は、一気に青ざめ、一斉に出入口に向かう。一気に向かったせいで、詰まってしまうなかなか抜け出せていない。

吉雄がつかうような顔をしながら、教壇付近にいる光に向かってきた。光はその弱りきった吉雄に、声をかける。

「大丈夫ですか！？早く、救急車を呼ばないと！」

「・・・無駄だ。いまさら間に合わない。それに、・・・救急車に乗ってきた人たちまでもが、危険にさらされてしまう。それよりもお前に言っておきたいことがある。」

「な、なんですか・・・？」

「由里を・・・いや・・・香とでも言っておこ、うかな・・・。香の中にいる由里は、・・・あいつは実は・・・香の前世の人なんだ・・・。」

「前世、の、人・・・？」

「ああ、前世の人だ。・・・そして、本当のこととも言つと・・・香と由里は同一だ。二重人格でも・・・霊に乗っ取られたのでもなんでもない。ただ彼女自身がそう思い込んでいるだけで・・・。」

光は、戸惑ったような声で、聞く。

「で、でも、香は確かに頭の中から声が聞こえてくる、だとか言っていましたよ？それに、頭の中の声に逆らうと、ひどい頭痛があるようにも見えたし・・・。」

「・・・それも彼女の自演だ。・・・いや・・・実際にひどい頭痛は・・・あつたん、だと思うが・・・それは・・・彼女の脳がそうしているだけ・・・で、・・・脳のどこかに・・・前世の記憶が残

っている・・・からだ。」

「どういうことなんですか？」

光は混乱に混乱が重なったように、頭の中で整理できていなかった。自然に吉雄が弱っていて、あまり喋らせてはいけないというのは分かっているというのに、質問をして、喋らせてしまう。そんな自分を光は、恥じた。そんなことは後で聞けばいいのだ。今はそれどころじゃないはず。それなのに、光自身、制御できなくなって聞いてしまうのだ。

吉雄は、口から血を吐き出した。どうやら、傷口がかなり開いてしまっているようで、もうまともに話すことが出来なくなりつつある。

それでも、吉雄は口を開く。

「香の・・・前世の存在である・・・由里は・・・17歳の時に、いじめが原因で・・・自殺したんだ・・・。由里は・・・自殺する時に・・・来世、でも人間を、恨むと・・・強く願ったんだ。・・・それ、で・・・こん、な事態に、なって、しまった。・・・こ、れは・・・俺の前世の・・・記、憶の中にもあった・・・。そ、うさ・・・俺も、彼女と同じで・・・前世、の記憶を持っている。自殺、した由、里の・・・未来の、暴走を・・・止めるって・・・強く願ったか、らな・・・。」

「・・・。見て、のと、おり・・・俺、の・・・寿命、も・・・あと、わ、ずか・・・だから、・・・由里・・・い、や、香を・・・助け、出すって・・・君、に、約束、して・・・ほ、し、いんだ・・・。」

光は絶句した。そんな光の顔を見ながら、吉雄は頭をガクツと落とす。光は、吉雄の力がなくなっているのに気がついて、激しく吉雄の方を揺さぶる。

「そ、そんな死なないください！俺はいつたいどうすりゃあいい

んだよ！どつやっつて、助けりゃあ・・・」
教室には、誰もいなくなっていて、光の音が響き渡った。

「アッハハハハハハッツ！」

光の心拍数が一気に上昇する。これは、何度も聞いたことがある大切な人の変わり果てた笑い声。香の大きな狂った笑い声だった。

いつの間にか、廊下から人の逃げ惑う音が聞こえなくなっていた。どうなったか。可能性は二つある。一つ目はもうみんな逃げた。二つ目は・・・・・・・・・・・・・・・・悲鳴を上げることなく呼吸をとめたか。

光は、何かを決意したかのように冷たくなりつつある吉雄を置き、目をキラリと光らせて、廊下へ移動する。

何かによって、光の思考回路が変化した。いや、強制的に変化された。

廊下に出ると、香がちょうどこちらへ向かってきていた。しかし、他の教室の中に入り込んだ瞬間だったので、気づかれてはいない。これがチャンスだった。何が何でも香の暴走を止めるというラストチャンス。

「どこにいるのー？デテキナサイヤアハハハッツ！」

笑いながら香が俺を探している叫び声が聞こえてくるのがわかる。普通の一般人がこれを見れば、どう考えても狂っている人間の狂声にしか聞こえない。しかし、今の光にはそんなふうには聞こえなかった。まるで、私を助けてとでも訴えかけてくるようにしか聞こえなかった。

光は、香のいる教室から離れるようにして、走った。これは逃げるためではない。香を助けるためだ。

まだ、この鉄のにおいが充満している学校に、生存者がいるかもしれない。まだ生命の系が切れていない人間がいるかもしれない。その人たちを生かすために、光はわざと大きな音を立てて廊下を駆け抜ける。

「ソオオコオオツカアアアツツ!!」

狂人と化している香は人を殺したいと必死だ。その愛人を光は外へ導かせるようにルートを計算して走り続けた。

香にこちらの姿が見えなければ、呪い殺すことなんてできやしない。もし、香が音を聞いただけで誰がその音を出しているのが分かり、その音を立てた人を呪い殺せるのならこの作戦は意味をなさない。

昇降口まで走りぬいてきた。呼吸をゼエゼエハーハーと乱し、汗があらゆるところから噴き出ている。走っている途中に倒れている人を何十人も見てきた。正直言つて、手が震えた。吐き気がした。躓きそうになった。

だが、それでも香を救うというその思いが光を、光の足を動かしていた。

昇降口から外に出て、グラウンドまで駆け抜けて光は立ち止った。時は刻々と動いている。止まってくれと頼んでも、遅くすらなってくれない。

だから、急ぐ。

くるりと光は反転して、昇降口を見据える。しかし、香は出てこなかった。

「な・・・!」

ドウナツテイルンダ。カオルハ、ナゼコナイ?ワカラナイ。
「クソツ!」

光は、再び昇降口に戻った。もしかしたら、他のターゲットを見つけてしまったのかもしれない。そうなれば、光の行動がゴミと化す。そして、そのゴミは焼却炉で焼却されるのだ。

光は、慎重に音をたてないようにして、香を探し始めた。

「そこね」

香は、ぐにやりと顔が崩れるほど笑顔になった。それを見た気弱な男子は涙をぼろぼろ流しながら、震えあがった。

「せっかく、コロスンダカラ、ジツクリ、イキタいな」

「!!! や、やめてくれ!!!」

その男子は、抵抗しようとしたが、途端に手が動かなくなった。

香の鼓動が速くなる。べろりと、舌なめずりをした。

「ど、どうなって」

「…シネ」

男子は、白目をむきながら、そのまま動かなくなった。

香は、その男子の手首を掴む。数秒しか時間がたっていないのだが、男子の手は死んでから、すでに何時間も経過していると錯覚してしまうくらい冷たかった。

楽しい。

香の頭に何度もその言葉がよぎる。何度も…、何度も…。

しかしその思考がすぐに途切れた。

「香!!! 遅かったか! 被害者がまたッ!」

この声には聞き覚えがあった。そう、香の

「光ウウウウウウッ!!! ソコカアアアアッ!」

恋人だった。

香がキラキラ目を光らせて、ぐるりと180度回転して、光の姿を確認しようとしたが、サッと姿を隠された。

これでは、あの力は使えない。

「ドコダアアアッ!」

「こつちだ!!! ついてこい、香!」

ゼエゼエと息を切らしながら、大声で叫ぶ香の頭には、光を殺したいという思いでいっぱいだった。あふれ出してしまいそうだ。

ダツと走り出す音が聞こえてきた。その音を頼りに殺人鬼の足は素早く動き出す。

「マアアアテエエツツ!!」

香の声は、あまりに大きな声を何度も連発したせいか、ガラガラ声になっていた。それでも叫び求めるその姿は、狂人そのもの。

香は、全速力で駆け追い詰める。いつもの香ではありえない速度で。それも、長時間。

何もかもが異常だった。

廊下を駆け走り、いつの間にか香は昇降口からグラウンドに来ていた。

光は、グラウンドの中央に立っていた。それを確認した香は、ジツクリと光との距離を縮めていく。

「これがお前ののだんだ世界なのか？」

光の問いに香は答えない。目の前のW高校には、もう人間がいなかった。これは、すべて香がやってしまった。もう手遅れだった。

「なあ？」

光がしつこく聞いてくる。

「こいつ、うぜえな。」

「そっだよ。」

「……どうして……おまえはそうなっちゃったんだよ……昔のお前のほうが良かった。今のおまえはただの殺人鬼だ。この世界ももう……終わる。」

昔のほうがよかった？んなわけねーだろ。

香は黙っている。

「きいてんのか！」

聞きたくねーよ。

恨んでやるよ。フッフ……。光……。シネ。

「おい!……うっ……」

「……」

光はどさりと倒れた。息はもうしていない。

香は光の顔を足でふんづけた。

「ああ・・・楽しい。」

光は相変わらず動かない。

こんなに簡単に人を殺せるなんて、今まで考えたこともなかった。というよりも人を殺すことは罪だと思ってきた。しかし、今の香の考えは違う。人を殺すことは・・・一種の快感だ。

「さて。」

香は光の頭から足を離すと今度は思いっきり光の頭をけた。変な音をたてる。そして、ありえない方向へ向く。

香は歩き出した。高校とは反対の方向だ。

この高校にはもう誰もいない。香の殺人衝動が抑えきれなくなり、次のターゲットを探しに行くのだ。次のターゲットは・・・あ、あそこがいいな。

香は今、マンションに向かっていく。昼食を求めに。

通常ではありえないことが起こった。

何と香が移動した後に、光がむくりと立ち上がったのだ。

「ごめんな。香。俺はもう普通の人間じゃないんだ。」

光は、ついさっき吉雄から不思議な力を授かった。これが最後の希望。

すべての。唯一の。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7780g/>

My WORLD

2010年10月20日19時38分発行